[別紙2]

審査の結果の要旨

論文提出者指名　　関口　佳司

本論文は「地下街路景観の分類と評価に関する研究」と題して、我が国の主要地下街路（全81地下街の内の61地下街）を踏査し、地下街路空間を「地下街路景観」という新たな視点から捉え、景観の基本形，景観のタイプ，景観の評価、そして地下空間から喚起される意味を分析している。地下空間に関する研究は、いわゆるハード研究（躯体構造，施工方法，等）が著しく発展しているにもかかわらず、ソフト研究（空間形態・構成，評価，意味論，等）が初期段階であることを踏まえると、本論文の成果として以下の点が高く評価できる。

(1)地下街路の基本空間および空間単位、景観の基本形を体系的に整理・分類している。すなわち、基本空間として「通路空間」,「交差空間」,「広場空間」,「昇降空間」の4種類に分類し、空間単位を「直線通路空間」,「3線交差空間」,「通路片側設広場空間」,「曲線昇降路空間」,「L字踊り場空間」,「外設1線昇降口空間」等の26種類に分類している。また、景観の基本形は空間軸に平行な視線で眺めた「地下基準視線景観」を定義し、「直線通路景観」,「分岐3線交差景観」,「通路軸方向通路片側設広場景観」,「曲線昇降路景観」,「L字踊り場内景観」,「通路軸垂直方向外設1線昇降口景観」等の46種類に分類している。このことは、新たに景観の観点から体系的に地下街路空間を捉えた分類を提示したといえる。

(2)類似性を基にした地下街路景観のタイプ分類を明らかにしている。すなわち、地下街路利用者が評価した景観の類似性を基に、1)サンシャイン景観，2)スターライト景観，3)スウィート景観，4)ゴースト景観，5)エレガンス景観，6)ロンリネス景観，7)ダイナミック景観の7種類の地下街路景観タイプを提示している。このことは、地下街路利用者の空間の心理的捉え方を明らかにしたといえる。

(3)地下街路景観の好ましさの順序評価とその評価語句による評価構造モデルを構築している。すなわち、好ましい地下街路景観とは「楽しく自然的なイメージで、明るく開放的な感覚を持たせ、吹き抜けの高い天井や広い空間を持つ形状、そこには太陽光や華やかな装飾がある景観」であり、好ましくない地下街路景観とは、「恐いイメージで、暗い照明による不安感や狭く低い空間からの圧迫感を感じる景観」であることを明らかにしている。また、評価語句を被験者の表現方法（評価語句の連結方法）に合わせた評価構造モデル（相対階層評価構造）を構築している。このことは、人々が地下街路景観を評価する言語の関連性を示した共に、地下街路空間の構成要素に対する評価のちがいを明らかにしたといえる。

(4)地下空間から喚起される意味を明らかにしている。すなわち、映画の地下空間シーンの「状況・景観」と推察できる制作者の「ねらい・効果」を表す語句を分析し、その語句の空間配置を行っている。その結果、1)地下空間シーンの“状況・景観”は“理想と現実”、“善と悪”という2軸によって表現され、「非制約空間」,「反社会活動空間」,「逃避空間」,「空想的童夢空間」,「物理的・社会的状況による必然的空間」,「宗教活動空間」に分類できる。2)地下空間シーンの“ねらい・効果”は、相互に関連し合うネットワークで表され、「未来への希望」,「制約を受けない自由」,「人間を超越した能力」,「清浄な心と行いが必要」,「安全有利に活動する隠密」,「閉鎖性を利用した防衛」,「精神的・衛生的不快」,「わかりづらい迷宮」,「突発的な現象」に分類できることを提示している。つまり、ほとんどの映画の地下シーンがネガティブな空間として採用されていることが地下空間を好ましくなく評価する要因の一つであると指摘できる。また、地下街路景観を好ましくも好ましくなくも評価する利用者と映画の製作者の間に地下空間に対する意識のズレがあることを提示している。

(5) 地下街路の景観タイプ，景観評価，地下空間から喚起される意味の相互の関連性を明らかにしている。このことは、従来の研究にない地下街路空間に関する認識，評価，意味を関連付けた成果である。

以上、本論文は既存地下街路の踏査によって得られた情報と利用者の評価を基に地下街路景観を分析し、快適な地下街路空間の創造に必要な設計・デザインの基礎的データを提示し、その実務的利用法を示唆している点において、工学的貢献が大であると認められる。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。